

第24回冬大会個人研究発表まとめ

**田辺元の国家論と同時代の国家論**  
**——国家法人説、国家有機体論、国体国家論との比較——**

岩井 洋子（一橋大学社会学研究科）

## I 報告の要旨

1. 田辺元は戦前「種の論理」を提唱した。この理論は戦後、総力戦体制を支える論として批判されてきた。しかし、田辺の意図はこれと異なると考えられる。すなわち、田辺は当時国定学説とされた国体論、及びドイツ流の国家学に対する社会・国家論を提示しようとしたのである。
2. 種の論理は田辺の独自の弁証法たる絶対媒介の論理によって構築される。ここに絶対媒介とはすべてのものは何かに否定的に媒介されて存在するが、その否定を否定することが重要であるとする論理である。国家は「種」という民族的要素と「個」によって成立している。個は種に帰属するが、やがて個と種とは深刻な対立が生ずる。種は個を服属させようとするが、個は種を権力的に支配しようとする。ところで、当時強国は相互に対立し、同時に国内にも大きな混乱を抱えていた。これは我国の場合も同様であった。その原因はこの個と種の対立にあるとするのが、田辺の見立てである。この対立を個の理性化によって止揚して、民族的でありながら、人類的普遍性を有する国家を成立させる、それが種の論理の眼目である。
3. 当時我国では国体国家論が国定学説とされる。その国体論の代表者に筧克彦がいた。筧は国民にはあまねく「普遍我」が宿り、「一心同体」であって、天皇の下、強固に連帯すべきであると唱える。一方、美濃部達吉に影響を与えたイェリネックの一般国家学も密教として、我国に根付いていた。これは国家に主権があり、天皇も国家機関であるとする説（天皇機関説）の根拠とされ、自由主義的国家論を提唱するものたちの支持を得ていた。

田辺はこうした論と異なる国家論を提示した。田辺は国民の道徳的な実践によって、国家は建設されるとする。そして、この実践こそが「絶対無」として国家統合の中心にある。また、田辺は天皇をこの絶対無の象徴と捉えていたと推される。一方、田辺は国民を機関とする一般国家学にも批判的であった。すなわち、田辺は国民が国家の有機的分子であって、その躍動的活動が国を支えると考えた。

## II 質疑・応答

1. 筧の論の性格について

箕は欧米の国家統合原理の核心にはキリスト教があると考えた。箕はこれに変わる統合原理を国家神道に見出した。そして、神道によって国家を統合して、列強との対抗を企図した。

2. 箕の国家統合原理は「普遍我」、田辺の場合は「絶対無」であるが、どこに性格的な違いがあるのか。

箕の場合はキリスト教的な絶対主義が根底にある。天皇は神とつながっている。これに対して、田辺の場合は仏教的な影響が強く、相対主義である。田辺には絶対神はいない。各個の道徳的実践という相対的なものが、国家を作り上げる要とみている。

3. 国民の道徳的実践、絶対無とは何か

絶対無は哲学と宗教の接点にあるもので、言語化することが難しい概念。ただ、あえて説明するとすれば以下のようなものである。

各個は各々、経済活動、政治活動等をそれなりの形で行っている。その活動を道徳的に照らして、意欲的に取り組む。これが田辺の言う「国民の実践」である。そして、各個の行為が道徳的か、意欲的かを知らしめる基準が絶対無である。つまり、絶対無とは自己の行為を映す鏡であると喩えることができる。それは自己の行為の意味を問い直す機会を提供する。

4. 種の論理は現代に有用性があるのか。

種の論理は2.26事件等、国内の激しい対立を念頭にした国内向けの国家論である。この論をそのままに現代に適用するのは困難である。ただ、現代にも宗教対立のような激しい対立がある。田辺の論は対立を対立として受け入れ、これを理性で止揚するものである。そこで、この論を修正すれば、そうした対立緩和の処方箋となりうる。